

トランジション調査へのコメント — 高大接続の観点から(2) —

名古屋大学名誉教授
神奈川大学特別招聘教授
安彦忠彦

1 中等カリキュラム研究の専門的関心から見て(前回調査時点復習)

(1) 「青年期教育」の一環としての「高校教育」という視点の衰弱

- ・学校教育における高大を通じる「青年期教育」の位置づけ
→「発達の視点」にみる「青年期 Adolescence」の「Identity 確立」
という独自の課題への関心の喪失＝「自立」への無関心

(2) 「高校教育」＝「受験準備教育」→「後期中等教育」の見方の後退
→「中等教育」の観点の重要性:「準備教育」←→「完成教育」

- 発達の視点から、単線型学校体系を維持しつつ、
高校生の発達特性に配慮することを原則とする。
- 「中等教育」の「前期」と「後期」を担当するのが、
日本では、「中学校」と「高校」であること。
- 本来の「中等教育」のキーワードは「自立」と「個性」
に焦点化されること。
 - (前期: 中学校) 自立への基礎・個性をさぐる(探求)
 - (後期: 高校) 自立への準備・個性を伸ばす(伸長)

・「中等教育」概念の保持が必要：

「自立」と「個性」がキーワード！

－前期：「自立への基礎」＝普通教育としての
技術・家庭科

○後期：「自立への準備」＝専門教育（職業教育）
としての専門教科目

－前期：「個性をさぐる」＝選択教科の設置原理：
広く、浅く、多く、短く、軽く

○後期：「個性をのぼす」＝選択教科の設置原理：
（前期の反対語で）狭く、深く、少なく、長く、重く

- ・高校教育＝「後期」中等教育
 - ・高等普通教育及び専門教育
 - 「高度な普通教育及び専門教育」
 - ・後期中等教育の本来の役割から見て：
 - 「高度な普通教育」
 - ＝「専門教育への基礎、〇〇観の自己形成」
 - 「自立への準備」
 - 「専門教育」
 - ＝「キャリア意識、自己選択・決定能力」
 - 「個性伸長」 + 「自立への準備」

2 「高校教育」の制度上の変質

(1) 学校制度上の微妙な変化

- ・学校教育法の改正により、第50条の目的規定に「進路に応じて」が新たに付加され、「多様性」と「キャリア意識」の醸成とが、従来以上に加味されている。
- ・選挙権等の18歳への引き下げの動きにより、「市民性の育成」への努力が求められている。

第六章 高等学校

第五十条 高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。

第五十一条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。

二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。

三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

(2) 中教審高校教育部会「審議まとめ」(平成26年6月)より。

・高校教育の「共通性の確保」と「多様性への対応」

→ 「コア」の把握・評価の必要性:その柱として、

① 社会・職業への円滑な移行に必要な力

② 市民性(市民社会に関する知識理解、社会の一員として参画し貢献する意識など)

・多様な学習ニーズへの細やかな対応

・普通科でのキャリア意識の向上や社会への円滑な移行促進

・多様なニーズに即した対応の促進(例:学び直し、大学等との接続)

・優れた人材・グローバル人材の育成やICT教育の推進

(3) 高大接続システム改革会議「最終報告」(平成28年3月)より。

・大学入学者選抜:各大学の個別選抜の改革に加えて、

ア)大学入学希望者学力評価テスト イ)自らの考えによる論述

ウ)高校時代の学習・活動歴 エ)エッセイ

オ)大学入学希望理由書・学修計画書

カ)面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション

・高校教育の「質の確保・向上」にむけた具体的施策

→ 二つのテストの導入：回数などにより、その性格が変わる！

○「高校基礎学力テスト」(基礎レベル)：主な特徴

- ・当面、主に基礎的な学習の達成度を自ら把握し、他に証明するためのもの
- ・個人単位での希望参加(事実上、学校単位になるのでは?)
- ・教科型(国語・数学・外国語・地理歴史・公民・理科を想定)だが多様な出題
- ・IRT(項目反応理論)によるCBT(コンピューター処理可能なテスト)も含む
- ・成績を各学校・各生徒に段階で表示(正誤や正答率等も表示)
- ・在学中に複数回受検可能(事実上は1回になる可能性が高い)

○「大学入学希望者学力評価テスト」(発展レベル)：主な特徴

- ・学習への意欲や主体性も問える教科横断型・総合型の問題
- ・個人単位の希望参加
- ・主として「記述式」の文章題を出題
- ・成績を点数でなく、段階で表示
- ・事実上、在学中に1回受検(一発勝負的性格は抜けない)

3 高校から大学への移行期の問題

- (1) 「Identityの確立」=「自分とは何か」との問いを中心に「自己確立」を目指す。← (2)(3)を含む「〇〇観の自己形成」への志向に注目。
- (2) 「個性の伸長」=「個性の探求」(自分の個性を探る)時期から「個性を伸ばす」時期への移行期！
- (3) 「社会的役割」の意識形成=「一人前=大人」たること:「誰もが社会人になる」ことへの自覚の確立。

○第1時点の問題提起:

- ① 現代社会のとらえ方: 高学歴主義による高校教育での受験教育の硬直化。
- ② 青年期の発達への無関心: 他者(社会)との交渉による自己確立の棚上げ(受験勉強への閉じ込め・囲い込み)
- ③ 自尊感情の低さ(学習意欲・生活意欲): 一般社会の高校への評価の低下(思春期の傾向+子ども扱いの長期化=過保護・過干渉)

○ 第2時点の調査結果へのコメント

・第2時点目は、高校から大学への移行期にあつて、高大接続の観点からは最も興味がひかれる時期であるが、最近の政治社会的動向も噛み合わせて、コメントしたい。

(1) 高校2年から大学1年への移行期間における成長は、「資質・能力」の面で変化しない者が最大で60%、成長したといえる者が最大で24%で、結果的には4人に1人がよい方向に成長したといえる。残りの最小で16%の者は悪い方、つまり成長しない方へ変わったのだとすれば、それは何で、どのような性質のものか明らかにしなければならない。→ 大学生になったことの「自覚」は？

→ 「変わらなかった」方のことの問題として、「学生」の「生徒」化、「大学」の「学校」化という意識上の問題がないか。

→ 「悪い方へ変わった」と見られる16%の学生は、「勉強しなくなった」ということなのか明確にする必要がある。生徒タイプとの関係も見ることがある。

(2) 「主体的な学習態度」の変数の重要性が示されたが、それが高2のときの「2つのライフ」に影響されているとしたら、まさに「高大接続」の部分でこの二つの要因をうまく結びつける効果が求められる。→「浪人」「休学」などの意味の変容？

→ 高校での進路指導と大学入学後のガイダンスの関係づけを図り、大学でのガイダンスが単に「大学での科目履修」における系統性や円滑な単位修得に終わらずに、大学卒業後の就職先・仕事の選択に結びつくようなものにする必要があるのではないか。

○ 大学入試の多様化により、入試が「大学と学生の相互選択」に向かっていると考えれば、入試をガイダンスの一つと捉え直すこともできる。

→ ただし、高2のときの「2つのライフ」意識が大きく変わることも必ずしも悪いことではない場合もあり、その学生次第である、ともいえる。(入学後、進路について考え直すなど)

(3) 高2の生徒タイプが大1の資質・能力、学習、キャリア形成に大きく影響しているとするれば、高大接続部分の大学入試は、大学に入ってから「新たな出発」とはなりにくいのか。

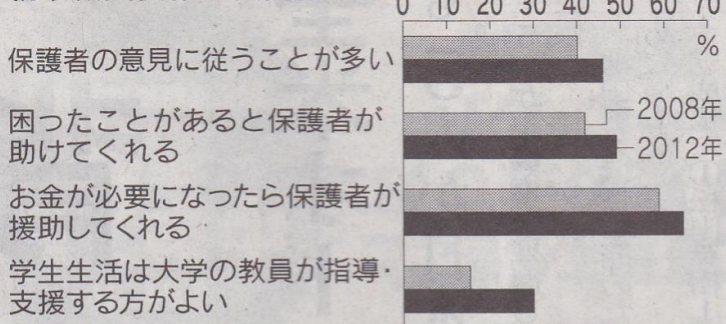
→ 大学に入ってから、高2のときの生徒タイプが変わる学生がいるように思われる。そういう学生の場合、大学に入った時点で、かなりはっきりしたキャリア意識を持ったため、大きくタイプを変えたものと考えたい。「生徒タイプ」の固定視については、どう考えるか。

→ 大学入試を「一種の通過儀礼」と考えれば、先に挙げた「自立」への「自覚」の変化を促すものだが、現在はそうになっていないと言ってよい。選挙権や国民投票権が18歳になったことを、入試より「高卒」の方に結び付けるべきかもしれない。

就職で意見に従う45%

困ったら助けてくれる5割

親や教員依存の傾向強まる



大学生親にべったり

親離れできない大学生が増えていることが、ベネッセ教育開発センターが2012年に実施した調査で分かった。学生生活や就職などで「保護者の意見に従うことが多い」と答えた学生は45・9%に上り、08年の前回調査から5・8ポイント増えた。担当者は「少子化に加え、就職難で親子関係が密接になる傾向がさらに強まっている」と分析している。

少子化+就職難 影響

調査は12年11月、無作為に抽出した大学1〜4年生4911人を対象に実施した。

「保護者の意見に従うことが多い」の回答では、男子が43・2%（前回より7・6ポイント増）、女子が49・5%（同2・8ポイント増）だった。男女の開きは縮小した。「困ったことがあると保護者が助けてくれる」と回答したのは、49%（同

調査は12年11月、無作為に抽出した大学1〜4年生4911人を対象に実施した。「保護者の意見に従うことが多い」の回答では、男子が43・2%（前回より7・6ポイント増）、女子が49・5%（同2・8ポイント増）だった。男女の開きは縮小した。「困ったことがあると保護者が助けてくれる」と回答したのは、49%（同

7・2ポイント増）。「お金が必要になったら保護者から援助してくれる」は64・4%（同5・6ポイント増）だった。親離れできない学生が増えている様子が見え始める。大学生生活でも受け身姿勢が目立つ。「学生生活は大学の教員が指導・支援する方がよい」は30%で前回よりも倍増。「教員が知識を一方的に教え